



対人コミュニケーションの

社会心理学

デイスコース・ポライトネスという観点から

宇佐美まゆみ

うさみ まゆみ

一 はじめに

対人コミュニケーションが心理学の格好の研究対象となるのは、人と人とのコミュニケーションというものが、言語という記号の意味だけではなく、非言語行動や文脈という「手がかり情報 (cue information)」なしには成り立たないものだからである。記号の意味の伝達だけでコミュニケーションが成立するのであれば、コミュニケーションの問題を、心理学的に考察する必要はなくなる。人は、いつも真意を口にす

談話における敬語使用を、「上下」「親疎」「場面」などによって固定的に分析するだけでは足りない。現実の言語行動は常に、動的、連続的なプロセスだからである。動的な現実に対応できる、新たな枠組みを提示する。

るわけではない。その理由が、「対人関係調節」のためであることは多い。ここに、社会心理学が、言語コミュニケーションを分析する意義と必要性が生じる。「会話」というものを、「話者間の相互作用によって作り上げられていく行為」として捉え、この営みを分析することによって、対人コミュニケーションのメカニズムを探ることもできるからである。本稿では、まず、これまで断片的に紹介されることの多かった Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論を総合的に捉えるために必要な「四つの側面」の骨子を示す。その

上で、その問題点を解決するために筆者が導入した「デイスコース・ポライトネス」という捉え方に基づいて、「共同発話」、「協調的発話」というある種の「会話におけるやりとりのスタイル」が、「デイスコース・ポライトネス」の中で、いかなる対人コミュニケーション上の機能を果たしているかを考察する。

二 対人コミュニケーションとポライトネス理論のかかわり

「ポライトネス理論」というと、言葉遣いの「丁寧さ」の理論であり、日本語の「敬語理論」と同義なのではないかと未だ誤解されることもある。ここで扱うポライトネスは、発話の効果としてのポライトネスで、敬語使用と同義ではない。複合的に構成されている Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論は、大きくは、以下の「四つの側面」から成る。彼らの理論は、この四つの側面すべてを総合的に捉えて検証しなければ意味がないにもかかわらず、そのうちの二、三の側面のみが取り上げられて、批判されることも多い。故に、ここでは、その骨子を、簡単にまとめておく。

(1) 鍵概念

人間の二つの基本的欲求として、他者に理解されたい、仲間と見なしてほしいという「ポジティブ・フェイス」と、他者に立ち入られたくないという「ネガティブ・フェイス」を立て、「ポライトネス」を、この二つのフェイスを脅かさないように配慮する「言語行動」として捉える。前者を「ポジティブ・ポライトネス」、後者を「ネガティブ・ポライトネス」と名づける。

(2) フェイス侵害度の見積もりの公式

ある発話行為 x が、「相手のフェイスを脅かす度合い」が以下の公式から見積もられ、それに応じたポライトネスが選択されるとする。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

W_x : フェイス侵害度 (Face Threat: FT 度)、行為 (x)

が相手のフェイスを脅かす度合い

D : 話し手 (Speaker) と聞き手 (Hearer) の「社会的距離 (Social Distance)」

P : 聞き手 (Hearer) の話し手 (Speaker) に対する「力 (Power)」

Rx: 特定の文化で、ある行為(x)が「相手にかける負荷度」の絶対的順位に基づく重み (absolute ranking of imposition)

xという行為が相手にかける負荷の度合い(R)の重みづけは、文化によって異なる。

(3) 具体的ストラテジー

選択し得る言語行動として以下の5つが挙げられており、さらに、ポジティブ・ポライトネスに15、ネガティブ・ポライトネスに10、オフ・レコード(非明示)に15の主要ストラテジーがあげられている。また、それぞれに、さらに細かい具体的なストラテジーの記述がある。

- ① FTの軽減行為を行わず、直接的な言語行動をとる。
(without redressive action, baldly) — 明示的
- ② ポジティブ・ポライトネス (positive politeness) — 明示的
- ③ ネガティブ・ポライトネス (negative politeness) — 明示的
- ④ 伝達意図を明示的に表さない(ほのめかす)。(off record) — 非明示的
- ⑤ FTA (Face Threatening Act) を行わない。

(doing no FTA)

(4) ストラテジーの選択を決定する場合

(2)の公式に基づいて見積もられたフェイス侵害度が、最も高い場合には、⑤のFTAを行わない、が選択されやすい。フェイス侵害度が比較的高く見積もられた場合は、④の非明示的ストラテジーが選択されやすく、フェイス侵害度の見積もりが小さくなるにつれ、③のネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、②のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが、この順に選択されやすくなる。そして、フェイス侵害度が最も低く見積もられた場合は、①の直接的言語行動が選択されやすいという、フェイス侵害度と各ストラテジーの関係が提示されている。

以上にまとめた(1)と(3)にかかわる問題については、これまで非印欧言語の言語学者によっても比較的よく取り上げられてきたが、(2)と(4)について、特にそれを検証しようとするような実証的な研究は、非印欧言語では、あまり試みられていない。しかし、言語社会心理学的観点からは、(2)の「フェイス侵害度の見積もり」に基づいて、ポライトネス・ストラテジーが選択されるとする捉え方こそが、有効に見える。それは、従来の社会言語学における敬語研究のように、例えば、

年下の上司に話す場合に「年輪と社会的地位の上下のどちらが優先されて言語行動が決められるのか」というような、「上下」「親疎」「場面」などの要因を、固定的、分離的に捉えて、その影響を択一的に同定しようとするような現象の捉え方とは異なり、言語行動を、より動的、連続的に捉えることを可能にしているからである。この公式の捉え方のように、「フェイス侵害度」が「総合的に」見積もられて、ポライトネス・ストラテジーが選択されると捉えるほうが、汎用性が高くなる。この点が、Brown & Levinsonのポライトネス理論が「動的」であると言われる所以であり、また、それ故に、この理論が、対人コミュニケーション理論にも通じ得るものになっているのである。

三 「デイスコース・ポライトネス(DP)」という捉え方

Brown & Levinsonのポライトネス理論は、「普遍的」であるとして提出されたが、日本語のような敬語を有する言語の一発話レベルにおける敬語使用をうまく説明できないという批判も招いてきた。語用論的な「ポライトネスの普遍理論」は、一個別言語の「敬語使用の原則」とは異なるものであり、それらを一々説明する必要も目的もない。故に、一個

別言語の敬語使用の詳細を説明できないという批判は、的を射ていない。しかし、彼らの理論が、普遍性にかかわる様々な問題点や批判を誘発する結果となっているという事実は、彼らの理論が、むしろ、基本的には、一発話行為レベルのポライトネスしか対象としていないという弱点を露呈する形になっていると捉える(宇佐美、二六六、三〇二b)。というのは、言語構造の違いが影響しやすい一発話/文レベルで、言語・文化に偏りなく、諸言語のポライトネスを比較するのは、至難の業だからである。筆者は、その問題点を解決すべく「デイスコース・ポライトネス」という考え方を導入し、「無標ポライトネス」や「相対的ポライトネス」という概念も含めて、談話レベルでポライトネスを捉える「ポライトネスの談話理論」の構想を模索中である(宇佐美、三〇二b)。「デイスコース・ポライトネス」は、以下のように定義する。すなわち、「一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体」(宇佐美、一六六)である。

デイスコース・ポライトネスという観点から、自然会話を分析した結果、日本語においては、むしろ、文レベルにおけ

る敬語の使用それ自体よりも、敬語が無標形（特定の談話で50%以上を占める形）である会話において、時々、常体にシフトするという談話レベルの要素としての「ダウンシフト」の割合や、「話題導入頻度」などのほうが、相手との関係に顕著に指標していることや、「あいづちの頻度」、「中途終了型発話の使用」、「ね」の適切な使用頻度」等々が、日本語のデイスコース・ポライトネスの重要な要素になっていることなどが報告されている（宇佐美、三〇一）。以下では、日本語のデイスコース・ポライトネスの要素になっていると考えられるその他の談話行動を幾つか紹介する。

四 デイスコース・ポライトネスの要素としての日本語会話の「やりとりのスタイル」——「協調的言語行動」

日本語の会話では、他の言語に比べて、聞き手の働きが大きいと言われている。例えば、慣れない英語話者には、さえずりのように聞こえてしまうほど頻繁にあいづちを打って、相手の話を促し、興味を持っていることを示す（あるいは、興味を持っていないふりをする）。これは、まさに、談話レベルのポジティブ・ポライトネスである。また、水谷（一九九）で論じられているような、複数の話者が、一つの文

を完結するという「共話」も、聞き手の話し手への一種の配慮であると考えられ、談話レベルのポライトネスと言える。ここでは、いわゆる共話も含む会話のやりとりの四つのパターンを示して、「協調的言語行動」という観点から考察する。

- (1) 音声的重複や話し手の発話要素の繰り返しがなく、聞き手がスムーズに文を完結させているもの

「例1」(30代半ばの男女、初対面。S男は、西武球場の近くに住んでいる巨人ファンである。)

S男…ええ、だからねー、読売新聞とってね、巨人戦に行こうと思ったんですけどね、で、いざ、あのー、野球の券もええですか？って頼んでみたら、

B女…笑い〜ライオンズのが来ちゃった。

- (2) 聞き手が、話し手が始めた文を完結させようとしたが、話し手も文を完結させたために、音声的重複が生じているもの

「例2」(30代女性同士、初対面)

K女…カリフォルニアとかだと、どうしても、そういうイメージへありますよね。〜(ハ)

H女…へありますよね。〜(ハ)

「注」ハ〜ハは、オーバーラップされた、ハ〜ハ〜ハは、オーバー

1 ラップした発話文

以上の例は、いずれも聞き手が話し手の言いたいことを予測し、協調的に発話文を完結させている「共話」、あるいは、「共同発話 (co-construction)」と言われているものである。これらは、まさに、「話者同士の相互作用が作り上げていく会話」の特徴を顕著に表している。「例1」は、敬語が無標形となっている会話であるが、相手の話のオチを予測して完結するB女の発話文は、常体になっている。つまり、文を相手に成り代わって完結するだけでなく、「視点」も相手に

一体化しているのである。だから、常体でも、失礼ではないと感じられるのである。談話レベルでしか捉えられないポジティブ・ポライトネスの典型と言ってもよいだろう。これらの例とは少し異なる以下のようなやりとりも、社会人の初対面の会話では、よく見られる。

(3) 話し手の発話文の完結が、挿入された聞き手の発話の影響を受けているが、話し手の発話文の基本的なスキーマは、保持されているもの

「例3」(30代女性同士、初対面)

H女1…でも、出せばだいたい、よっぽどのケースじゃない限り…、

K女… ああ、そうですね。
H女2… ええ、通るようになったという、話なんですけどね。

「基本的な文字化の原則 (BTSJ)」(宇佐美、一九九)では、H女1とH女2は、間にK女の発話文が入ったために、二つのラインに分断されていても、一文を形成していると捉え、一発話文とする。話しことばに特徴的なのは、傍線部のやりとりである。K女の「ああ、そうですね」というあいづちに、H女は2で、自分の発話の途中であるにもかかわらず、「ええ」と応答した後で、H女1で、自分が始めた発話文を完結している。この傍線部のやりとりを「発話文内ペア」と呼んでいるが、日本語の会話には、この発話文内ペアを含むやりとりが非常に多い。英語などとは異なり、文の終結部でなくとも、文節の区切り目であれば、あいづちが入り得る。「ああ、そうですね」というような文の形を成すあいづちが入れば、自分の発話文の途中であっても、まず、「ええ」と答えてから、発話文を完結する。非常に律儀なやりとりが行われているのである。しかし、自分が始めた発話文の基本的スキーマは変わっていない。これに対して、次のようなやりとりもある。

(4) 挿入された聞き手の発話の影響を受けて、話し手の後半の発話文のスキーマが、変化しているもの

「例4」(20代友人男女。タスクとして読んだ短い物語の登場人物を、好意の持てる順に順位づけをしている。)

B男1: シヤルと、でもなんか引つかかるんだ、でもまあいいや、ペーターのほうが、

あいいや、ペーターのほうが、

O女: うん、ま、それはともといいでしょ?

B男2: シヤルの方が上ということだ。

B男は、「ペーターのほうが、下の順位である」と言いかけていたが、O女の「(シヤルは)もともといいでしょ」という発話につられて、「シヤルのほうが、いい、つまり、上である」という言い方に、発話文のスキーマを変えている。このような現象になると、「協調的言語行動」というより、単に相手の発話に影響を受けただけのように見えるかもしれない。しかし、例えば、相手の「シヤルのほうが上でしょ」という発話を受けて、「うん、ペーターのほうが下」と答えるのは、たとえ意味は同じになっても、いかにも非協調的でポライトでないように思える。このように考えると、人は、会話という相互作用の中で、自分の発話文のスキーマを論理的に筋を通して完結することよりも、相手との協調

調を優先して、できるだけ相手の発話に合わせて、相手が意味を理解しやすいように会話を進めているとも考えられるのである。

(1)や(2)のような共同発話は、相手が少し言い淀んだ時などに、助け船を出すような形で行われることも多い。協調的言語行動の典型である。また、(3)のように、自分の発話文の中で、単なる「ええ」や「ああ」ではない「あー、そうですか」というようなあいづちが入った場合は、それに「ええ」と答えてから、自分の発話文を完結するという話し方は、隣接応答ペアの原則を守ろうとするポライトネスと考えられる。さらに、(4)のように、自分の発話の途中に、単なるあいづちではない実質的発話が入った場合には、自分の元の発話文のスキーマを変えても、相手の発話に合わせて発話文を完結する、というような「話し方」は、まさに、談話レベルのポジティブ・ポライトネスだと考えてもよいだろう。このような「会話におけるやりとり」を、デイスコース・ポライトネスという観点から分析していくことは、対人コミュニケーションのあり方の背後にある心理と言語使用との関係を解き明かしていくことにも通じる。その試みは、まだ始まったばかりである。

【引用文献】

- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- 本谷信子 (1982) 「共話」から「対話」へ『日本語学』第三巻第四号 明治書院
- 平佐美まゆみ (1982) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BJS)」の開発について『日本人の談話行動のスク립ト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』文部省科学研究費一般研究 (C) 研究成果報告書。 (URL: <http://nihongo.human.metro-u.ac.jp/nic-j/nihongo/mic-j-kaiva.htm>)
- 平佐美まゆみ (1986) 「ポライトネス理論の展開: デイスコース・ポライトネスという捉え方」『日本研究・教育年報』九年度版 東京外国語大学日本課程編、12-21
- 佐美まゆみ (2003a) 「デイスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能: 敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること」『語学研究所論集』第2号、1-15頁、東京外国語大学語学研究所
- 佐美まゆみ (2003b) 「談話のポライトネス・ポライトネスの談話理論構想」『第七回国立国語研究所国際シンポジウム報告書―談話のポライトネス』国立国語研究所編
- (東京外国語大学外国語学部)

言語社会心理学・日本語教育学

『言語』前号(5月号)内容 [定価 890 円]

*特集・へ達人伝授 外国語学習法

小径、裏道、隠れ道……

外国語学習の経験豊富な十一名が、自身の学習体験を語り、外国語学習のコツを伝授します。

英語から入る学習法、似ている言語を一網打尽にする方法、短期集中法、アジアの言語に強くなる方法、音から入る学習法など、いろいろなタイプを紹介します。

「執筆者」尾河直哉、カール・ルイス、金高純平、近藤大介、清水 誠、千野栄一、西江雅之、松枝 到、松下周二、三谷恵子、村瀬絵理子

「情報ページ」『各国語学習情報』辞書、入門書、文法書の書誌情報・学習サイトのURL情報

* 巻頭エッセイ

三浦雅士・野内良三・宮内伸子 杉本誠子 その生涯と今日的意味 (中)

* 連載

ミニマリストプログラム入門⑤ 渡辺 明

連載「生と死の記号学」⑤ 渡辺 明

連載「ジプシー」の伝承⑤ 渡辺 明

連載「方音研究への招待」⑤ 渡辺 明

連載「ことばというバスポート」⑤ 渡辺 明

連載「読書日記」⑤ 渡辺 明

CMワード・ウォッチング 赤堀友美

チャレンジャー 福島教隆

亀井肇の新語・世相語・流行語 亀井肇